

CSR報告書に対する第三者による所見



神戸大学大学院
経営学研究科教授
國部 克彦

進化するCSR活動と報告書

東芝のCSR報告書は、ステークホルダー重視の編集方針を掲げ、その内容を年々進化させています。今年度の報告書では、重要性の判定基準を細分化させ、対話にもとづく社会・環境活動を展開しており、これはCSR活動及び情報開示の進化として高く評価することができます。東芝のステークホルダー重視の姿勢は一貫しており、今年度は、ステークホルダーの声を実際の活動に活かすように活動していることが随所に報告されており、同社のCSR活動についての水準の高さを示しています。

環境ビジョン2050の意義

東芝は2050年のあるべき姿を見据えた新ビジョン「環境ビジョン2050」を策定しています。このような超長期のビジョンはともすればスローガンのなりやすいものですが、東芝の場合、企業戦略と結び付けて、事業活動を通じて2050年時点の地球環境をいかに改善するかが検討されており、本報告書ではそのための具体的な事例が紹介されています。このような本業を通じた地球環境保全への姿勢は極めて重要であり、今後は技術革新を含めたこのような取り組みの体系化された活動と情報開示が期待されます。

CSRのマネジメント

東芝では、2007年度下期から、社内カンパニーや主要グループ会社で、CSRの重点テーマを設定して活動を推進して

います。CSR活動は、個別の部署でばらばらに行っていると全体像が見えにくいですが、CSR活動として全社を総覧すると、各部署の強みと弱みがわかり、活動の展開が期待されます。東芝のCSRマネジメントは、そのような総覧性を備えているだけでなく、できるだけ定量化された目標を設定して進捗状況の確認・指導にまで踏み込んでおり、この点は高く評価することができます。ただし、報告書上ではそのすべてが開示されているわけではなく、実際の活動レベルの深さをうまく伝える工夫が今後は必要とされると思います。

グローバルなCSR活動

世界有数の国際企業である東芝のCSR活動は当然のことながらグローバルに展開されており、報告書の中では、サプライチェーンでのCSR推進を含めて、海外の情報がふんだんに開示されています。特に、国際的にステークホルダー・エンゲージメントを展開して、CSR活動に反映させている姿勢は高く評価できます。ただ、海外に関する情報開示は特徴のあるトピックスが中心となっているため、今後は、グローバル活動全体のCSR面での評価も重要な課題になると考えます。

本業を通じたCSR活動

東芝では、CSR活動を事業活動と結び付け、本業を通じたCSRを目指しています。このような姿勢は地球環境面でも、社会面でも極めて重要です。トップコミットメントでのイノベーションの重視もその現われと思われます。今後は、CSRにおけるイノベーションとは何かを明示的に捉えて活動して、情報開示されるならば、東芝自身のCSR活動を一層進化させるだけでなく、他の企業に対する重要なモデル提供になると期待しています。

【略歴】

大阪市立大学大学院経営学研究科修了。博士(経営学)。2001年より現職。
2003年研究成果活用企業「環境管理会計研究所」創設。経済産業省「マテリアルフローコスト会計開発普及事業委員会」委員長、環境省「環境報告書ガイドライン検討委員会」委員等を歴任。著書に「環境経営・会計」(有斐閣)などがある。

第三者による所見を受けて

CSR報告書の作成には、社内の多くの関係部門が毎年大変な努力で取り組みます。その努力が、報告書作成のためだけに終わることなく、現業のCSR経営そのもののPDCAの中にしっかりと位置づけられ、次のステップにつながるよう取り組んできました。これはCSRのプロセス・イノベーションであると考えます。

今後は、こうした取り組みに加えて、本業を通じた社会の課題解決への取り組みをさらに強化し、CSRのバリュー・イノベーションをめざしたいと思います。

情報開示の内容と方法、グローバルな説明のあり方などについても絶えず検証し、ステークホルダーの皆様から信頼される「地球内企業」をめざします。